

科技部補助專題研究計畫成果報告

(期中進度報告/期末報告)

(計畫名稱)

日本的台灣殖民事始與「國民文學」書寫

---以日據時期北白川宮能久親王形象建構與明治維新「敗者」史觀為中心---

計畫類別： 日本的台灣殖民事始與「國民文學」書寫

---以日據時期北白川宮能久親王形象建構與明治維新「敗者」史觀為中心---

個別型計畫 整合型計畫

計畫編號：NSC 101-2410-H-004-147-MY2

執行期間： 101 年 8 月 1 日至 103 年 7 月 31 日

計畫主持人：吳佩珍

共同主持人：

計畫參與人員：王琬葶、杜昀珩

本計畫除繳交成果報告外，另含下列出國報告，共 0 份：

移地研究心得報告

出席國際學術會議心得報告

國際合作研究計畫國外研究報告

本計畫除繳交成果報告外，另含下列出國報告，共 1 份：

執行國際合作與移地研究心得報告

出席國際學術會議心得報告

期末報告處理方式：

1. 公開方式：

非列管計畫亦不具下列情形，立即公開查詢

涉及專利或其他智慧財產權， 一年 二年後可公開查詢

2. 「本研究」是否已有嚴重損及公共利益之發現： 否 是

3. 「本報告」是否建議提供政府單位施政參考 否 是， （請列舉提供之單位；本部不經審議，依勾選逕予轉送）

中華民國 103 年 10 月 9 日

科技部補助專題研究計畫成果報告自評表

請就研究內容與原計畫相符程度、達成預期目標情況、研究成果之學術或應用價值（簡要敘述成果所代表之意義、價值、影響或進一步發展之可能性）、是否適合在學術期刊發表或申請專利、主要發現（簡要敘述成果是否有嚴重損及公共利益之發現）或其他有關價值等，作一綜合評估。

1. 請就研究內容與原計畫相符程度、達成預期目標情況作一綜合評估

2. 達成目標

未達成目標（請說明，以 100 字為限）

實驗失敗

因故實驗中斷

其他原因

說明：

3. 研究成果在學術期刊發表或申請專利等情形：

論文： 已發表 未發表之文稿 撰寫中 無

專利： 已獲得 申請中 無

技轉： 已技轉 洽談中 無

其他：（以 100 字為限）

4. 請依學術成就、技術創新、社會影響等方面，評估研究成果之學術或應用價值（簡要敘述成果所代表之意義、價值、影響或進一步發展之可能性），如已有嚴重損及公共利益之發現，請簡述可能損及之相關程度（以 500 字為限）

本研究計畫省思日本近期的新史觀，再對照至今為止台灣研究，可看出對於日本領台五十年間的研究史觀無異是沿用明治維新之後薩長兩藩所主導的「勝者」史觀，也因為如此，面對當時統治者「日本」的認識不僅平板同時一元化，在後殖民研究論述上過度單純化日本近代的「國族主義」，對日本領台五十年間在台日人的文學框架建構，基本上均被視為以日本宗主國為主體的「日本」史觀的「國民文學」。而本研究從「敗者」的東北新史觀出發，重新爬梳日本統治期在台日人文學者，發現多為東北「敗者」集團出身者或者與東北地域有極深淵源者居多的歷史事實，以西川滿為首，島田謹二、濱田隼雄者都在此行列。不僅如此，如果轉換以「敗者」的東北史觀觀察當時在台日人的文學創作及「國民文學」框架建構的構想與意圖，便能看出有著更複雜的重層以及無法還原於「單一」的日本「國族主義」的結構，

本計劃執行成果:

國內論文集:

- 1.<從明治敗者到鎮臺神祇——以北白川宮形象為中心——>(中央研究院人社中心亞太區域研究專題中心論文集，已被接受)

國內研討會論文:

- 1.<從明治敗者到鎮臺神祇——以北白川宮形象為中心——>(東亞近代社會的知識建構」學術研討會，中央研究院人社中心亞太區域研究專題中心 2013.5.)
- 2.〈北白川宮征台疑義與明治「敗者」史觀〉(「近代史觀與公共性」研討會，政治大學人文中心、政治大學台灣文學研究所 2013.12.)

國外期刊:

1. <日本の「台湾植民事始」と明治の「敗者」史観>,' 跨境日本語文學研究, Vol.1, No.1, pp.191~203.(2014.6)(參考本報告最後論文附件)

國外研討會論文

- 1.〈日本、台湾における北白川宮の表象をめぐって—1895年—1945年を中心に〉,' 東亞與同時代日本文學論壇, 韓國高麗大學(2013.10)
- 2.〈日本植民地期のマスメディアにみる北白川宮像〉(北京師範大學, 2014.11.25~26)

科技部補助專題研究計畫執行國際合作與移地研究心得報告

日期：103 年 10 月 9 日

計畫編號	NSC 101-2410-H-004-147-MY2		
計畫名稱	日本的台灣殖民事始與「國民文學」書寫 ---以日據時期北白川宮能久親王形象建構與明治維新「敗者」史觀為中心---		
出國人員姓名	吳佩珍	服務機構及職稱	國立政治大學台灣文學研究所
出國時間	103 年 7 月 21 日至 103 年 7 月 31 日	出國地點	日本東京早稻田大學與國會圖書館
出國研究目的	<input type="checkbox"/> 實驗 <input type="checkbox"/> 田野調查 <input type="checkbox"/> 採集樣本 <input type="checkbox"/> 國際合作研究 <input checked="" type="checkbox"/> 使用國外研究設施		

一、執行國際合作與移地研究過程

本次執行計劃，須收集研究主題北白川宮於 1910 年代的相關出版物以及傳記，透過此次移地研究，於東京早稻田大學以及國會圖書館，順利取得相關資料。

二、研究成果

此次移地研究成果，將以〈日本植民地期のマスメディアにみる北白川宮像〉為題於 2014 年 11 月 25~26 日於北京師範大學發表。

三、建議

無

四、本次出國若屬國際合作研究，雙方合作性質係屬：(可複選)

- 分工收集研究資料
- 交換分析實驗或調查結果
- 共同執行理論建立模式並驗證
- 共同執行歸納與比較分析
- 元件或產品分工研發

其他 (請填寫) _____

五、其他

Age Literature Studies

tion

ure in East Asia)

ean Literature During Colonial

During Japanese Colonialism in

Magazine *Geibun*

Takao's Position in Manchuria

mori

en Kennou's Novel

n the Multiple Networks of the

se-born Japanese Focused on

the "Defeated"

WWII

ation by Chen LengXue

re of Keijo Imperial University

rea) no *Jitsugyo*(1904~1914) and

l of Taiwan and Statistics on

ture in the Korean Peninsula

in Korea

that transcended the Nation-

跨境 日本語文学研究

東アジアにおける
日本語雑誌の流通と植民地文学

2014
Vol.1

ISSN 2383-5222

2014 Vol.1
Border Crossings

The Journal of Japanese-Language Literature Studies

跨境 創刊号 日本語文学研究

エッセイ—跨境の言葉

西成彦 移動文学 / 比較文学者にとって「移動」とは何か
朴裕河 「境界」を跨いでく東アジア作りへ
[跨境人] 田原 夢と性愛

東アジアにおける日本語雑誌の流通と植民地文学

中根隆行 異郷への仮託
金 孝 順 芥川龍之介の自殺と植民地朝鮮の文学
劉 春 英 中国東北部における日拠時期の日本語雑誌の言説空間
単 援 朝 雑誌「芸文」の成立と変遷について
王 志 松 翻訳と「満洲文学」
林 濟 「満洲浪漫」における「白日の書」への一考察
魏 晨 「満洲」童話作家・石森延男の登場
祝 然 戦争末期の「北窓」
横路啓子 雑誌「台湾青年」
和 泉 司 在台2世の描く「台湾」と「台湾人」

一般論文

呉佩珍 / 日比嘉高 / 波瀾剛 / 国蕊 / 尹大石

東アジアと同時代日本語文学フォーラム x 高麗大学校日本研究センター

日本の「台湾植民事始」と明治「敗者」史観

北白川宮の表象をめぐる

吳佩珍

✉ peichen@nccu.edu.tw

Currently, the outlook toward the fifty-year period of Japanese rule in Taiwan in Taiwanese studies has been taken from the standpoint of the triumphant group, which represented the Satsuma and Chosun regimes. For this reason, acknowledgement to the ruling Japanese in Taiwanese studies is flat and monotonous, which tended to monopolize and purify modern Japanese nationalism.

Moreover, the literary frameworks constructed by Japanese writers in colonial Taiwan tended to be seen as typical “national literature” subordinated to metropolitan Japan. However, a review of the leading Japanese writers in colonial Taiwan reveals that most were from the northeast of Japan; the defeated group in the Meiji Restoration, or related to them. Besides, we can see from the literary statements of the writers from the defeated group the internalization of the multiple layers and complexities of nationalism. The representative example is the legends of Prince Kitashirakawa, who was seen as the legitimate successor to Emperor Komei, which were broadened and reproduced during the colonial period. Not only the legend of Prince Kitashirakawa but also the “national literature” constructed by the writers of the defeated group differs from the standpoint of the triumphant group behind the Meiji Restoration, which has been taken as the mainstream. Through that contrast, they offered the prospect of renewal in the recently acquired territory of Taiwan.

The purpose of this paper is to examine Japan's early colonial history in Taiwan, the legends of and writings on Prince Kitashirakawa, and how the writers from the defeated group constructed the “national literature” in colonial Taiwan.

Keywords the early colonial history(植民地初期), the history of the defeated(敗者史観), the Prince of Kitashirakawa(北白川宮), Nishikawa Mitsuru(西川満)

いかわれる⁹。

川宮能久親王の明治維新史における位置づけをあ
台湾征伐途中、病没した北白川宮の「輪王寺宮」時
とともに台湾討伐をした森鷗外が執筆した北白
川宮、北白川宮の重層的なイメージを検討する。

一 北白川宮の表象変化

一般的には当時近衛師団団長北白川宮が基隆
を占領した。『北白川宮能久親王事蹟』によると、北
白川宮は「嘉義より南進の途中に於て風土病に罹らせ
るが、二十八日に至り病勢革り」¹⁰、10月28日に
基隆で没した。台湾神社が建てられ、北白川宮
が台湾統治の象徴となったことは、表面的にはべつ
く明かされていない。それは主流史観の立場におく見方であ
る。改めて検証すれば、いままで明治維新以後、薩
長藩閥構築された主流史観とは異なる歴史側面が見
えてくる。明治維新の際、幕府と朝廷(新政府)との政争
の中で、新帝となり、謀反者とみなされた歴史が、再

幕府による奥羽越列藩の東軍が、天皇をめぐ
る。東北の敗者史観から改めて見直されるように
戦前においては、大量の史料を駆使し、佐幕
派の幕末維新史を編集、論述した藤原相之助の『仙
臺前、北白川宮(幕末の輪王寺宮)がかつて天皇

の。幕末時期に上野東叡山寛永寺の「輪王寺宮」公現法親王
を、明治維新を区切りとしてその呼び名を使いわけ
る。教育会、1937)。のちに『皇族軍人傳記集成 第3巻 北白川宮
能久親王(東京：ゆまに書房、2010.12)、

立説が、戦後に入ってから、ようやく解禁されつつあ
つた。瀧川政次郎「知られざる天皇」(『新潮』
社、1950[昭和25年])に収録される。武者小路實「戊辰役
録田永吉「いわゆる大政改元をめぐって」(『秋大史学』14
「東北朝廷」成立に関する一考察」(『近代日本史の新研究1』)(東
京：「勝者」史観に対して、近來、東北の「敗者」史観も見ら
れる。専門的に紹介している。2004年より歴史春秋社によって
『情のほかに、明治維新史を東北視点から、解説しないし

として擁立されたこと、ないし東北朝廷の成立という歴史事実がほとんど言及されてこ
なかつた。この現象は、日本戦前の尊皇主義、天皇の神格化および皇国史観などの思想
が歴史解釈権を独占していたことに深く関わっている。日本敗戦後、日本が米軍の支配
下におかれて、天皇の「神格化」が崩壊し、天皇の権威も危機に直面していた。長いあい
だ、タブー視とされてきたこの幕末政争をめぐる明治維新史の新視点も、このような戦
後の状況のなかでようやく解禁された¹³。そのなかで藤井徳行の「明治元年 所謂「東北朝
廷」成立に関する一考察」が戦後初めて、東北朝廷の新帝擁立言説に対して簡明に整理と
分析を行った。

1868(慶應四)年に、幕府の命令を受け京都の治安の維持を担当していた会津藩が、薩
摩、長州と武力衝突を起こし、これが鳥羽伏見戦争の引き金になった。薩長両藩が牛
耳っていた新政府は、戦争が起こってから七日後、仙台藩に会津藩藩主、松平容保を討
伐するという命令をくださった。しかしながら、東北諸藩は、新政府軍に対して不満なだ
けでなく、その政権の正当性にも不信感を抱いていた。と同時に、新政府軍の松平容保
を死罪に処するという要求は、私怨をはさむ報復行為と思われる。同年5月3日仙台
藩を盟主とする奥羽越列藩が正式に成立したのに対して、薩長の官軍が東北に出兵、討
伐した。いわゆる戊辰戦争である。新政府軍が上野の寛永寺を侵襲した際、「輪王寺宮」
が薩長派の彰義隊に守られながら、東北に逃れ、仙台にたどり着いた。その後、東北諸
藩によって「東武天皇」として擁立された¹⁴。

「輪王寺宮」公現法親王が東北諸藩によって新帝として擁立された理由はいくつかあ
る。孝明天皇が強硬な攘夷論者であり、慶応二(1866)年まで抱瘡で亡くなるまで、京都
守護職を担当していた会津藩には厚い信頼を寄せていた¹⁵。そのため、薩長の官軍に対
抗するために、大義名分が必要とされた東北諸藩にとって、孝明天皇の義弟だった「輪
王寺宮」が理想的な新帝人選であった¹⁶。

それから、「輪王寺宮」¹⁷が東北で新帝として擁立されたが、それは長いあいだ、幕府

12 藤井徳行「明治元年 所謂「東北朝廷」成立に関する一考察」(手塚豊編『近代日本史の新研究1』東京：北樹出版、1981.10)、p.222。

13 John Dower 'Imperial Democracy: Evading Responsibility, Embracing Defeat' (New York: W.W. Norton & Co Inc., 2000), pp.319-345。

14 百瀬明治「奥羽越列藩同盟—その成立から解体まで」(歴史讀本編輯部編「カメラが撮られた会津戊辰戦争」東京：新人物往来社、2012)、pp.6-27。

15 孝明天皇の死因は諸説あり、そのなかで毒殺説が常につきまとっていた。毒殺説について、孝明天皇が公武合体に傾き、開国派に敵愾な態度をとっていたため、倒幕派と見られた岩倉具視一派によって毒殺されたといわれている。伊良子光孝「天脈拝診—孝明天皇拝診日記—」(1)(2)(『医譚』復刊第47-48号)を参照。また、藤井徳行「明治元年所謂「東北朝廷」成立に関する一考察」(手塚豊編『近代日本史の新研究1』、東京：北樹出版、1981)を参照。

16 星亮一「奥羽越列藩同盟—東日本政府樹立の夢」(中央公論社、1995.3)、pp.70-71。

17 輪王寺は、元來天海大僧正(1563?-1643)が徳川三代将軍家光に進言し、開山されたもので、徳川將軍家の菩提寺ともなった。その後の公海が日光門主として、後水尾天皇の皇子、尊敬親王を迎え、その初代の輪王寺宮は、為守選法親王だ。その後、明治維新まで、計十三代十二人の法親王が日光門主「輪王寺宮」になっていた。歴代の日光門主は、幕府が皇族を迎えていた。そのため、「輪王寺宮」が日光宮門主となり、江戸東叡山輪王寺、すなわち上野の寛永寺に駐在していた。北白川宮能久親王が遷俗する前、その最後の輪王寺宮であった。菅原信海『日本仏教と神祇信仰』(東京：春秋社、2007)、pp.165-191を参照。輪王寺宮(のち

寺宮は上野寛永寺の貫主であり、幕府の菩提
宗の天台大僧正が三代將軍の支持を得て、寛永
に獻策したと伝えられる。「もしも西国が逆
取山の宮門跡をもって当今と仰ぎ、平定の軍を
秘策」一すなわち幕府の朝廷および西側の大名
の「秘策」が幕府内部および箱根より東側の諸藩
にそれが理由に、代々の「輪王寺宮」は京都より宮
徳川將軍が「輪王寺宮」を尊崇し、その言に聽
光の宮様即ち東の天子であつたのである。そ
東照神君が天照大神であつたのと同じである
新帝として擁立されたのは、歴史の偶然的な
によって裏付けられているといえよう。

王寺宮は投降、謝罪し、京都で閉門自省を命
し、北白川宮を襲名した²¹。その後、「北白川
だが、留学期間にドイツの貴族女性と婚約し
治天皇を激怒させた。そのため、留学をやむ
居を命じられ、自省させられた。その後、近
団長に昇進した。同年5月30日に師団の半分の
命じられて、台湾征討を始めた。

島に駐屯していたが、それは、万が一、清国
ることを想定していたからだ。しかしなが
なかつたうに、清国も講和を提議したた
結したのち、急遽台湾を占領するようにと、

、伏見宮家親王の第九子である。二歳で仁孝天皇の養
三歳で江戸の東叡山に入る。「皇族軍人傳記集成」第3巻
を参照。

一考察(手塚豊編『近代日本史の新研究』1、東京:北樹出
231を参照。また、長尾宇道「東武皇帝即位事件―最幕
歴史読本』、2010.8)、p.126を参照。

した、歴史に埋もれたもう一人の天皇。『歴史読本』、

0)、p.124。

投降を決意し、執当だった義親と勇忍が免職とな
を受けた。義親がすべての責任を負うことになり、次
宮が義親に擁立され、佐幕路線を決定したことを指
したのである」と自分に全責任を課した。のちに義親
藩同盟の盟主と「東武天皇」になったのは、「輪王寺宮」
徳行「明治元年 所謂「東北朝廷」成立に関する一考察」(手
1981)、pp.306-308を参照。

いては、浅見雅男「北白川宮能久親王―明治帝を激怒させ
330-332を参照。明治天皇伝記「明治天皇紀」も北白川宮

命じられた。明治政府はただちに同月10日に樺山資紀を台湾総督に任命し、当時の征清
大総督小松宮彰義親王は、北白川宮が率いる近衛師団を派遣し、台湾の駐屯軍に当てる
ことを決定した。同月16日に征清総督は、近衛師団に台湾総督の命令、そしてその指揮
に従うことを命じ、待機させた。明治期以来、日本皇族が軍職につくようになったた
め、一般の将校はその階級が皇族出身の軍人より高くても、皇族軍人を任意に指揮する
ことができなかつた。もともと守備軍力で遠東半島に駐屯していた近衛師団が、突然守
備兵力で台湾に上陸することを命じられ、のちに戦闘体制を余儀なく強いられたこと自
体は疑点が多い。と同時に「北白川宮」は皇族として、危険を極める「蛮荒の地」に入り、
征伐することも同じく尋常ではなかつた。また北白川宮が遠東半島に駐屯した当時、す
でにマラリヤにかかっていたといわれている²³。そのため、基隆から上陸し台南で逝
去するまで、滞在期間がわずかであったにもかかわらず、その直後、台湾神社の完成に
よって鎮台の精神的象徴になり、台湾神社の鎮守の神になった²⁴。日本の植民地期にお
いて、北白川宮の台湾征戦の事跡が、伝記と伝説という形式を通して、反復、再生され
て台湾に流布し、その存在は日本の台湾統治の精神的象徴となった。

3 東北朝廷の天皇擁立説の虚と実―森鷗外『能久親王事蹟』にみる北白川宮像

日本の植民地時期における能久親王事蹟の生産と流布は、基本的には1910年代より、
親王の台湾征伐に随行していた将校による回顧録という形式から始まり、のちにさまざま
なジャンルに広がった。しかしながら、伝記にせよ、教育目的のプロパガンダにせ
よ、その台湾征伐以前の歴史がほとんど触れられていない。そのかわりに、台湾の滞在
期間、つまり、1895年5月30日から10月28日までに焦点が当てられている²⁵。台湾と日
本に現存している能久親王の伝記および資料を調査すれば、その「輪王寺宮」時代、つま
り「明治維新」の主流史観が強調しているように、かつて佐幕派とともに東北に流され
て、実際に「謀反者」として見られた歴史が、ある程度散見されていることがわかる。さ
らに伝記における北白川宮の台湾討伐の戦役を詳細に検証すれば、疑わしい箇所をいく
つか発見できる。幕末における「輪王寺宮」、東北諸藩そして明治政府との政争によっ
てもたらされた錯綜した関係は、北白川宮が台湾征討の歴史に影を落としていると思われ

23 台湾教育會『北白川宮能久親王事蹟』(台北:台湾教育會, 1937)、p.20。

24 台湾の碑史では、北白川宮が新竹にたどり着いた際、当地の牛眠山で流弾にあたって死亡したといわれて
いる。日本軍の士気をくじくことになると危惧されたため、逝去した消息を隠蔽した。黄榮洛「北白川宮
は新竹で死んだ」(台湾分館所蔵, 1986)を参照。それに対して、日本ないし戦前の台湾において、流布し
ていた北白川宮の伝記は、死因はマラリヤの悪化であり、台湾で逝去したもののその死の消息は極秘と
され、遺体は日本に運ばれて、東京で国葬が行われたとしている。1908年に出版された森鷗外『能久親王
事蹟』にそのいきさつが詳細に綴られている。『鷗外全集』第3巻(東京:岩波書店, 1987)を参照。

25 たとえば、台湾教育會が編纂した『北白川宮能久親王事蹟』(台北:台湾教育會, 1937)、および元近衛師団通
訳官吉野利喜馬『北白川宮征台始末』(台北:台湾日日新報社, 1923)等。

ながら台湾に上陸し、そして未知な戦闘状態
ていた副官西川虎次郎の回顧よりわかる。「所
のまま、急遽台湾に赴いたのであります。勿
また戦争を預期するようなことは、全然な
集合を命じられ、以後海軍の通報に依り上陸地
て漸く我々は、無事平穩に上陸できぬかも知れ

撃)は、伝記『北白川宮』のなかで、北白川宮が
して台湾征討の始末について、それぞれ疑問を
義名分を借りて、徳川幕府と東北諸藩を征伐
する行為であると同時に、幕府の代わりに政権
と当時奥羽越列藩の動きを上述のように解釈
まいと決心し、一戦を惜しまなかった。その
よ、奥羽越列藩に盟主と祭り上げられ、薩長両
なった、と指摘されている。また、その伝記
伐するようにと命じられたことの理不尽、そ
れば、北白川宮が当時立たされた窮地は想像
る。そのひとつは、近衛師団は元来、北京原
という島国を戦場として考えていなかったた
不足していたことである。さらに上陸した当
ちえなかった。それから、台湾総督府は、も
わかっていたようだった。当時薩長勢力が主
がら、守備隊を指揮する権限を持っていたほ
の守備、地理位置そして抗日軍の情報の把握が
龜谷天尊(聖馨)の『北白川宮』のなかでは、北白
られて、最後「新領土」台湾で死去したという
書石)のように扱われていたという歴史の「影

近衛師団に随行していた十余名の将校が組んで
な伝記『能久親王事蹟』は、その尽力によって
うえ、まず「業陰会」の会員が手分けして調査
師団に属していた鷗外に依頼した。書き上げ

た後、また会員によって校正が行われ、ようやく1908(明治四一)年に刊行された。森鷗
外の『能久親王事蹟』の影響力は、学術論文および歴史小説によって頻りに引用されてい
たことからうかがい知れる。同時にこの伝記は日本統治期の台湾において、在台日本人
文学者にも大きな影響を与えた²⁹。鷗外に執筆を依頼した理由は、鷗外が日清戦争に参
戦した後、近衛師団の台湾移動に随行し、台湾討伐にも参加したからである。また、鷗
外研究のなかで、鷗外が日清戦争が終了したのち、直ちに緊急に異動させられ、台湾討
伐に参加させられたことはずっと疑問視されてきた。鷗外の台湾滞在と動向について
は、島田謹二の『征台陣中の森鷗外』が詳しい。島田謹二は鷗外の台湾戦役に関わる、た
とえば『明治二十七八年日清戦史』、『明治二十七八年役陣中日誌』などの資料を、丹念に
調査し、鷗外の確実な滞在期間が1895(明治二八)年5月30日から同年9月27—28日までだ
と、突き止めた。鷗外の日清戦争および台湾討伐記録の『徂征日記』では、台湾戦役につ
いてほとんどふれられていない。そのかわりに鷗外の台湾上陸および征台戦役への参加
記録は1908年出版された『能久親王事蹟』のほうに詳しく綴られている³⁰。また、森鷗外
は日清戦争と1895年の台湾上陸および征台戦に参加したとはいえ、台湾について言及し
ているのは『徂征日記』のほか、北白川宮伝記『能久親王事蹟』が最も多いといえよう³¹。

『能久親王事蹟』において、幕末の「輪王寺宮」時代、とくに東北諸藩によって新帝とし
て擁立され、のちに監禁され自省するようにと命じられていた経緯について、ほとん
どあいまいで簡略化された描写しかない。それと対照的なのは、北白川宮が台湾に上陸
してから、南に向かって前進していた様子の描写である。たとえば、薩長両藩が率いる
政府軍が上野寛永寺を攻撃したことによって、上野の「寛永寺」に駐屯して「輪王寺宮」を
護衛していた彰義隊は撃退され、榎本武揚が軍艦長鯨丸で羽田湾に「輪王寺宮」を迎えに
赴き、宮が東北行を決断したいきさつについて、鷗外は次のように描いている。「東叡
山の道場兵燹に罹りて、身を寄すべき処なし。頃日左右に臥るに、皆江戸の危険にし
て、縦ひ大総督に倚らんも、また安全を期し難かるべきを語れり。よりて暫く乱を奥州
に避けて、皇軍の国内を平定せん日を待たんとすと」[下線筆者]³²。この視点は、明らか
にこの歴史事実をぼかし、「輪王寺宮」が謀反を起こす意図がないと強調するばかりであ
る。また、「新政府軍=皇軍」という描き方からも、出版当時の明治政府の史観への配慮
がうかがいしれる。それに対して、「輪王寺宮」が東北に到着してから、どのように東北
諸藩によって新帝として擁立されたかについては、ほとんど言及していない。東北に滞
在していた期間についての描写は、主に「輪王寺宮」の側近覚王院義親の視点を通して、
「輪王寺宮」がどのように江戸から東北に逃れて奥羽越列藩によって盟主として推挙され
たかといういきさつを追っている。主人公の「輪王寺宮」自身の東北に到着した当時の情

29 たとえば、島田謹二『征台陣中の森鷗外』、藤井徳行『明治元年 所謂「東北朝廷」成立に関する一考察』(手塚
豊編『近代日本史の新研究』1、東京：北樹出版、1981)、そして吉村昭の歴史小説『彰義隊』(東京：新潮社、
2010)は、『能久親王事蹟』を引用すると同時に、この伝記の影響についてふれている。

30 島田謹二『征台陣中の森鷗外』(『華風島文学志—日本詩人の台湾体験』東京：明治書院、1995)、pp.65-67。

31 同前掲書、p.94。

32 森鷗外『能久親王事蹟』(『鷗外全集』第3巻、東京：岩波書店、1987)、p.536。

て』(『台湾』、1936.1)、p.4。

1933)。龜谷聖馨は、号が天尊である。大乗仏教の華嚴
校校長も務め、教育者でもある。『華嚴大経の研究』、『仏

pp.82-83。

どないといえよう。それは、奥羽越列藩が組織し
が仙台に到着したと同時に、仙台藩をはじめ諸藩
まらせようとした経過の描写からもうかがえる。
五左衛門、横田直平、会津の小野権之丞(中略)の
か、白石城を旅館に充てさせ給はんことを請ふ。
公職府と称せり。寛王院答へていはく。仙台に赴
ことならば、宮必ずやこれに従ひ給はん³³。こ
とは好対照となっている。「会津藩戊辰戦争日誌」
168)年1月から松平容保が東京に送られた10月ま
の動向を追う史料である。この史料は、慶応四
列藩同盟盟主になることを承諾し、また、同年6
白石城で盟主「輪王寺宮」を「東武皇帝」として擁立
る。東北朝廷の体制が確立したと同時に、新政
この「輪王寺宮」の東北時代の描写を照らし合わせ
事実を極力回避していることがわかる。それは、
て、とうとう「新帝」として擁立されたという一
義親によるもののように描写されていることか
の湾底に上陸してから、台南で亡くなるまでの征
べてみれば、「輪王寺宮」時代と「北白川宮」時代の
る。その描写からもわかるように、鴫外が「輪王
維新以後の主流の「勝者」史観をはばかりながら、
の北白川宮像を仕上げようと苦心している痕跡が

ことは、鴫外が自らこの戦役に参加したこと
って台湾に上陸し台湾討伐戦役に参加し、「徂征
のため、能久親王が逝去したのち、その旧部下
「能久親王事蹟」を執筆した。このなかで、近衛
いる。それに対して、「徂征日記」ではあまり言
は、おもに北白川宮の台湾征戦の英雄的な事跡を
功績のほか、鎮守神としての正当性を強調するの
宮」がかつて明治天皇に反旗を翻した歴史的記憶
した。その「反逆」、「謀反」の前半生をあいまい
と浮き彫りにしようとした。村上裕紀は、能久親
向心力の所在であると指摘した。それは、親王が

近代において皇族身分を持っている軍人英雄であるだけでなく、敗者から英雄に転身し
うるものだということを意味している。そのため、このような生涯は藩閥と旧幕府両者
の向心力を凝縮する機能をもっている。鴫外はこの伝記を執筆した際、親王に投射した
このようなまなざしに気づいたはずであろう³⁶。

末延芳晴は「森鷗外と日清・日露戦争」のなかで、「親王が一時は朝廷に反旗を翻したも
の、「東武天皇」を僭称したと指摘した³⁷。と同時に鴫外がこの伝記のなかで、とく
に親王の死因について、「親王にとって都合の悪いことや隠すべき事実は落とされ
たり、書き直されたりしている可能性が高いことも見落としてはならないだろう」「軍神
としての親王の生を神話化するために、相当程度の潤色を加えられている可能性が高く」
「鴫外は、軍部と日本政府、ひいては明治天皇の意を慮って、曲筆を弄したものと思わ
れる³⁸とも指摘している。また、中村文雄は「森鷗外と明治国家」のなかで、日清戦争
終了後、鴫外は即時に帰国できると期待していたが、野戦衛生官の石黒忠憲に命じら
れ、直ちに台湾に転戦することとなる。そして、その事実を「徂征日記」に照らし合わせ
てみれば、鴫外がそのなかで、台湾征戦をほとんど言及せず、台湾における職位の位置
づけ、ないし責任帰属の不明などについては、石黒との不仲に起因すると思われると指
摘した³⁹。以上の先行研究が提起した問題点は、今後、森鷗外の「能久親王事蹟」の視点
および史観をより深く探究する手がかりになると思う。

4 おわりに

森鷗外の「能久親王事蹟」が出版されてから約百年後、吉村昭の最後の歴史小説、「輪
王寺宮」を主人公にした「彰義隊」は、森鷗外の北白川宮の代表的な伝記「能久親王事蹟」を
強烈に意識しながら、「輪王寺宮」と幕末の歴史描写について、「敗者」史観から出発した
ものだった。そのため、「輪王寺宮」の視点から薩長両藩への感情描写がよりストレート
に描かれている。たとえば、「輪王寺宮」が東北諸藩の盟主になったのち、「巨大な武力
を背景に朝廷をまるめこみ、江戸城も手中におさめた薩長両藩に対する激しい敵意を抱
くようになっていた⁴⁰」などの心境描写はその一例である。

「敗者史観」から考えれば、明治維新以後、薩長両藩等という藩閥政治が主導していた
時期に、明治(薩長)政府が征台戦役を利用し、過去の歴史を清算、ないし「周縁者」を排
除しようとしたことは、考えられなくもない。征台戦役に臨んだ際、台湾初代総督、樺
山資紀をはじめ、薩長両藩出身者が主導する台湾総督府による軍事調度の実況を見

36 村上祐紀「皇族」を書くー「能久親王事蹟」論(「鷗外研究」88号, 2011.1), pp.52-53.

37 末延芳晴「森鷗外と日清・日露戦争」(東京:平凡社, 2002.12), p.101.

38 同前, pp.100-101.

39 中村文雄「森鷗外と明治国家」(東京:三一書房, 1992.12), pp.121-122.

40 吉村昭「彰義隊」(東京:新潮社, 2010), pp.325-326.

戦役への参加も例のない異動によるものだった。台湾戦役が明治(薩長)政府にとって、かつては好都合なものであったと考えるのは、深読

によって台南で亡くなった後、同年11月に日清に奉祀する議が掲載された⁴¹。翌年、貴族院が提案された。決議過程において、徳川の反対者は、侯爵醍醐忠順だった。1868(慶応)送られ、奥羽鎮撫総督府の副総督として奥羽明らかにしなかったが、おそらくかつて敵軍残っていたのではないかと推測できる。そのに賛成する演説を発表した。実際には、曾我戦を辞した者で、北白川宮には好感を抱いて議過程をみれば、幕末政争の際、「薩長」と「東」もまだ存在していた。菅浩二は、能久親王にたいして、当時の日本社会には「親王がこののやうな」感覚を抱く人が多かったと指摘しは、単に皇族を追悼ないし顕彰するだけでないの歴史を救済するためにもある。

戦争』、東京：新人物往來社。
せたドイツ貴族との婚約』、東京：『文藝春秋』、
人物往來社。
島外研究』88号)。
ちくま学芸文庫。

した、歴史に埋もれたもう一人の天皇』(『歴史読本』、東

東京：ゆまに書房。
凡社。
と開拓三神—官幣大社台湾神社についての基礎的研究—

95(明治28)11.7)。
開拓三神—官幣大社台湾神社についての基礎的研究—
p.104-106。

- 小森陽一(2001)『ポストコロニアル』、東京：岩波書店。
星亮一(1995)『奥羽越後藩同盟—東日本政府樹立の夢』、東京：中央公論社。
島田謹二(1995)『華僑島文学志—日本詩人の台湾体験』、東京：明治書院。
中村文雄(1992)『森鷗外と明治国家』、東京：三一書房。
森鷗外(1987)『能久親王事蹟』(『鷗外全集』第三巻、東京：岩波書店)。
西川滿(1986)『自傳』、東京：人間の星社。
黄榮洛(1986)『北白川宮は新竹で死んだ』、台北：台湾分館。
手塚豊雄(1981)『近代日本史の新研究1』、東京：北樹出版。
鎌田永吉(1967)『いわゆる大政改元をめぐって』(『秋大史学』14号)。
武者小路權(1953)『戊辰役の一資料』(『史学雑誌』第61編3号)。
瀧川政次郎(1950.10)『知られざる天皇』、東京：『新潮』(47-10)。
台湾教育会編(1937)『北白川宮能久親王事蹟』、台北：台湾教育會。
西川虎次郎(1936.1)『北白川宮能久親王殿下の御征戦に従ひて』(『台湾』)。
龜谷天壽・渡部星峯(1933)『北白川宮』、東京：吉川弘文館。
吉野利喜馬(1923)『北白川宮征台始末』、台北：台湾日日新報社。
大阪朝日新聞(1895)『能久親王を台湾に奉祀する議』(『大阪朝日新聞』)。
Dower, John. (2000). *Embracing Defeat*. New York: W.W. Norton & Co Inc.
吳佩珍(2007.12)『日本自由民権運動與台湾議會設置請願運動—以蔣渭水(入獄日記)中『西郷南洲傳』為中心—』(『台灣文學學報』第12期、國立政治大学)。
吳歌人(2006)『「日本」とは何か：試論「佳人之奇遇」中重層的國/族想像』(黃自進編『近現代日本社會的蛻變』、台北：中央研究院亞太區域研究專題中心)。

吳佩珍 Peichen WU

(台湾) 国立政治大学台湾文学研究所。准教授。日本明治、昭和期女性文学、日台植民地期比較文学、文化。『真杉静枝與殖民地台湾』(台北：聯經出版、2013.9)、『「サヨンの鐘」神話の解体—真杉静枝「サヨンの鐘」作品群を中心に』『社会文学』第27期(東京：社会文学研究会、2008.2)、『The Peripheral Body of Empire: Shakespearean Adaptations and Taiwan's Geopolitics.』*Re-Playing Shakespeare in Asia*(Poonam Trivedi ed, New York: Routledge, 2010)、『Performing Gender Along the Lesbian Continuum: The Politics of Sexual Identity in the Seito Society』, *Women's Sexualities and masculinities in a Globalizing Asia*. (Saskia E. Wieringa, Evelyn Blackwood, and Abha Bhaya ed, New York: Palgrave Macmillan Press, 2007)。翻訳書：Faye Yuan Kleeman著『帝國的太陽下：日本の台湾及南方殖民地文學』(Under an Imperial Sun: Japanese Colonial Literature of Taiwan and the South)(台北：麦田出版社、2010)、津島佑子著『太過野蠻的』(あまりに野蠻な)(台北：印刷出版、2011)。